

医薬品ではないが薬効の期待されるものについて。

以下、内容はフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より引用しています。

ご理解を深めていただくため、追記、説明を加えています。

日本では医薬品は、薬事法第2条によって定められています。これには医療用医薬品、一般用医薬品があります。医師若しくは歯科医師によって使用され又はこれらの者の処方せん若しくは指示によって使用されることを目的として供給される医薬品が医療用医薬品です。これ以外に医薬品があります。すなわち、一般の人が薬局等で購入し、自らの判断で使用する医薬品であって、通常、安全性が確保できる成分の配合によるものが多い一般用医薬品があります。

以下、医薬品ではありませんが、一般に薬と呼ばれるものについて述べます。

1. 中医薬とは

中医薬とは中医学理論に基づいた代表的処方を錠剤、丸薬、顆粒、シロップ、など飲みやすい形にした薬、漢方製剤、生薬製剤、のこと。

中医学は、中国で旧石器時代より行われてきた伝統医学です。東洋医学、中国伝統医学とも呼ばれ、近年は欧米でも Traditional Chinese medicine (TCM、伝統中国医学)の名で、補完・代替医療として広く行われています。

中国には西洋医学を専門とする西

洋医師と中医師（ちゅういし、traditional Chinese physician）がいます。中医師は中国の伝統医学である中医学を実践する医師。香港を中華人民共和国、台湾、アメリカ合衆国国家資格です。

治療法:には鍼灸: 細い針を身体のツボに刺したり、灸を燃やしたりして、身体のエネルギーの流れを調整する治療法です。治療は中国の伝統的な薬草を用いた治療法で、患者の体質や症状に合わせて処方されます。推拿: 身体をマッサージしたり、指圧したりして、身体のバランスを整える治療法も用います。

2. 漢方薬（かんぼうやく）とは

日本で発展した漢方医学の中で用いられる生薬（下記）を用いた医薬品全般を指します。

漢方薬は、中国伝統学を中華人民共和国が統一化した中医学で用いられる生薬製剤「中医薬、中成薬」や韓医学で用いられる「韓薬」と共通するものも多いです。一般的に漢方薬といった場合には、日本の漢方医学で用いられる生薬製剤を意味します。これらの中で、

日本の保険診療で使用できる医療用漢方（漢方薬で医薬品）が148種類あり、約9割の日本の医師がこれを処方しているといわれています。国の決まりにより3種類以上の調合はできません。

3. 薬草（薬用植物）とは

薬草（やくそう）、薬用植物（やくよ

うしょくぶつ、英語：medicinal plant ヒンディー語：औषधीय पौधे) とは、薬用に用いる植物の総称です。そのまま摂取・塗布するほか、簡単な加工をしたり、有効成分を抽出したりするなどして用いられます。草本類だけでなく木本類薬草という、草本ばかりではなく木本も使われているため、専門的・学術的に正確には薬用植物と言われます。薬用とする植物は、全植物体を使用するものは比較的少なく、薬効成分が多く含まれる根皮、樹皮、葉、花など、それぞれの有効部分を用いています。また、医薬品として使用しなくても利用価値があり、民間療法として用いられる薬用植物も、便宜上「薬草」と称しています。健康食品の原料や料理（薬膳）の食材として使われたり、風呂（薬湯）に入れられたりする薬用植物もあります。

4. 生薬（しょうやく、きぐすり、英：Crude drug）とは、

天然に存在する薬効を持つ産物を、そこから有効成分を精製することなく、体質の改善を目的として用いる薬の総称。生薬の大半は植物由来のものですが、動物や鉱物などに由来するものもあります。世界各地の伝統医学で多くの生薬が用いられています。

上記の漢方薬は、生薬由来ですが漢方医学に基づいたものであり同一の概念ではありません。

日本で利用される主な生薬（植物）由来の成分名、医薬品名を別表1に示します。

日本では、上記のごとく生薬由来の有効成分（構造式がわかっている）が医薬品になっているものがあります。また、複数の生薬そのものを混ぜた漢方薬の一部が保険診療で医薬品として利用されています（上記）。

5. ハーブ（英：herb）とは、

明確な定義は存在しませんが、一般的には料理の香り付けや保存料、薬、香料、防虫などに利用されたり、香りに鎮静・興奮などの作用がある有用植物で^[1]、緑の葉を持つ草、茎のやわらかい植物などを指します。同様の有用植物であっても、種子、実、根、樹皮などは、と呼ばれることが多いが、苔から木本まで、香りや薬効がある有用植物全般をハーブとして扱う場合もあります。

ハーブは「草」あるいは「野草」、「草木」を意味するラテン語：herba を語源とし、フランス語で herbe (エルブ)、古英語で herbe (アーブ) となり、これが変化して英語の herb となり、日本に伝わってハーブという言葉が使われるようになったとのこと。

(担当：医療法人徳洲会
全南病院長 上山康男)

別表1 日本で利用される主な生薬（植物）由来の成分名、医薬品名。

植物名、生薬名	成分名（医薬品名）	薬理作用
インドジャボク	アジュマリン	抗不整脈
インドジャボク	レセルピン	血圧降下
ロートコン、ベラドンナコン	アトロピン	副交感神経遮断
ロートコン、ベラドンナコン	スコポラミン	副交感神経遮断
オウレン、オウバク	ベルベリン	健胃、整腸
茶、カカオ、コーヒーノキ	カフェイン	中枢興奮、利尿
楠	d-カンファー	局所刺激、強心
コカノキ	コカイン	局所麻酔
アヘン	コデイン	鎮痛、鎮咳
アヘン	モルヒネ	鎮痛
アヘン	ノスカピン	鎮咳
アヘン	パパペリン	鎮痙
イヌサフラン	コルヒチン	抗痛風
ジギタリス	ジゴキシシン	強心、整脈
ジギタリス	ジギトキシシン	強心、整脈
マオウ	エフェドリン	交感神経興奮
麦角菌	エルゴメトリン	子宮収縮、止血
麦角菌	エルゴタミン	鎮痛、子宮収縮
マクリ	カイニン酸	回虫駆除
アンミ実	ケリン	冠動脈拡張
ハッカ	I-メントール	消炎
カラバル豆	フィゾスチグミン	抗コリンエステラーゼ
ヤボランジ	ピロカルピン	副交感神経興奮
キナノキ	キニジン	抗不整脈
キナノキ	キニーネ	抗マラリア
ミヨブヨモギ	サントニン	回虫駆除
ストロファンツス	G-ストロファンチン	強心、整脈
タチジャコウソウ	チモール	殺菌（外用）
クラーレノキ	ツボクラリン	骨格筋弛緩